
ドンちゃん

松本 和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドンちゃん

【Zマーク】

Z2602B

【作者名】

松本 和

【あらすじ】

生物室には蛙がいた。私がドンちゃんと名付けて、可愛がった。
別にただの蛙なんだけどね。

高校の生物室には蛙がいた。大きい蛙で水の中でしか生活をしない蛙だった。

どんな種類の蛙なのは知らない。…別に興味もなかった。

初めてその蛙を見たときに『その大きな体と丸いお腹からか、『ドンちゃん』』といふ名前が浮かんできた。

だから私はその蛙をドンちゃんと呼ぶよくなつた。

生物室には掃除の時にしか行かなかつた。掃除で生物室に行く時はいつもドンちゃんのことを考えていた。ドンちゃんは生物室に入つてすぐのところにある水槽の中でも暮らしていた。

ドンちゃんはめつたに動かなかつた。いつも決まって両手を顔の横に漂わせたまま動かなかつた。…そのお決まりのポーズが好きだつた。時々手を舐める仕草をした。素早く手を動かして、大きな口で手を舐めた。

一度、ドンちゃんに餌をあげたことがある。ドンちゃんの餌はレバーだ。私はレバーが嫌いだから餌をあげるのがちょっと嫌だつた。椅子に乗つて水槽の上からピンセツトを使つてレバーをあげる。

私はドンちゃんが近づいてきて食べるんだと思つていたけど、ドンちゃんは餌を食べに近づいては来なかつた。

私はレバーを挟んだピンセツトをドンちゃんの口の近くまで持つていった。

ドンちゃんは両手をワカワカと動かして、皿にも上まりぬ速やかにバーを食べた。

両手をあまりにも素早く動かすので溺れて、必死にもがいているよう

… ドンちゃんに餌をあげたのは、その時の一回きりだった。もつとあづられればよかつたのに。

「ドンちゃん」と会つてから半年がたつた。久しぶりに生物室の掃除当番が回ってきた。

入ったときに水槽を覗き「んたけ」とトントンちゃんとしながでた

「どうしていいんですか？」

・と生物の先生に聞いたら

死にた
がた
。

と言われた。

悲しくなんてなかつたよ。
……ただの蛙だもん。私が名前を付けた

だけ。餌をあげただけ。

… エンちゃんと呼んで
一品変わることで…
それだけ

う。それだけ。なのに、どうして時間がたつにつれて寂しくなるんだろう

どうして生物室に行くたびにも「ドンちゃんがいるはずのない水槽を覗いてしまうんだろ?」

ドンちゃん。寂しいよ。

いつの間にそんなに私に好かれたの?……生物室に行くたび、寂し

い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2602b/>

ドンちゃん

2010年10月12日04時38分発行